ゲーテ文学をめぐって

——ファウストの現代的意義・序Ⅱ——

加　藤　慶　二

ゲーテ文学を紐解く時，広い意味ではいわゆる古典主義文学と云えるかもしれないが，それは最早やただ過ぎ去った時代のものとして現代では評価されるのか，それとも時代を越えながらも各時代に問われうるものを依然として内包し続けているのか，このことはドイツに愛惜の念を抱きながらもフランスに移住した詩人ハイネから，現在ではついこの前スイスの誇るシュタイガー教授と，同じく作家フリッシュの間でそれぞれの立場から激しい論争がチューリヒでくりひろげられ，それから端を発しヨーロッパの各地で問題とされたことはあまりにも有名である。

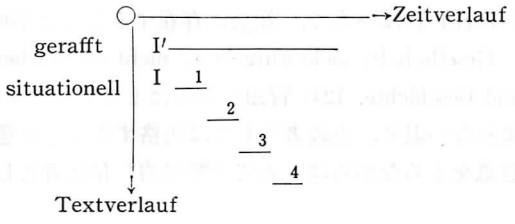
なるほど表現主義的傾向を一つの特色としてもつ現代文学は，時代的に見るならば近代文学も当然ふくまれるが，程度の差こそあれ就中古典主義文学の否定のうえに成立しているとも云える。何故なら産業革命以来，特に19世紀から20世紀にかけて文化的秩序が次々に崩壊してゆく過程で成立して近代文化は人間の主体性の喪失を求めると同時にヨーロッパの古い伝統を受け継いだあまたの人々に対して孤独な個人の体験を，必然的な悲惨なものとした。かかる時代の推移を前提としながら「孤」なる「個」への，いわば詩人にとって宿命的な時代の課題をそれぞれ考察してゆくと，確かにゲーテはカフカやリルケ等とは異ったホフマンスタール以前の文学として位置づけられよう。

しかしこの小論では "Daß ich erkenne, was die Welt / Im Innerslen zusammenhält," (Faust : 381～2) へのファウストのたゆまざる行為を，根底において人間存在への問としてとらえることにより実存的観点からゲーテ・ファウストの現代的意義を考察してみたいと思う。[註1]

(I)

ゲーテをカフカと並列させて論じているのはH. ホーディンであろう。[註2] 彼の言わんとするところは諦念的思想に基づいた晩年のゲーテの思想が東洋的それに本質的に近づいていることを前提にし，このことは即ち人間中心の描写ではなく，われわれをとりまく環境世界，即ち事物の世界にひとまずもどし[註3]，そこから改めて人間関係を見つめるカフカの手法を根底においては一致しているのであるという見解をとっている。

H. ビンダー[註4]は「カフカにおける主題と構成」のなかで，彼の文体の一つの特徴として「要約文章（ラフザッツ）」があることを指摘している。それをいま図解で示すと右の図のようになるというのである。彼の示した様々の前提を基とし



て「ヘルマンとドロテアーの」一節を図に示せば，それはまさしく幾何学的な階段状の図式になり，両者の相違は一目にして識別できる。しかしたいへん雑な仮定だが，ファウストをドラマという形式で述べたロマーンとするならば，部分的にはカフカにおける「要約文章」が随所にでてくるのである。

(Ⅱ)

Faust, aus dem Palaste tretend, tastet an den Türpfosten.
Wie das Geklirr der Spaten mich ergetzt!
Es ist die Menge, die mir frönet,
Die Erde mit sich selbrt versöhnet,
Den Wellen ihre Grenze setzt,
Das Meer mit strengem Band umzieht. (11543)

Meph. halblaut. Man spricht, wie man mir Nachricht gab,
von keinem Graben, doch vom Grab. (11558)

この二つの対話からもわかるとおり，確かに晩年のファウストは現実の出来事に対して盲目になったため，正確に判断することは不可能であった。このようなことから P. ミヘルゼンはファウストの内的光を病的な盲目と眩惑によるものとし一連の詩的象徴から捉えている[註5]ことはかつて触れたとおりであるが，この是々非々はともかくとして，ファウストは「憂い」により盲人となり，現実の世界が見えなくなった代りに，心の中に光が与えられていることは事実である。

ファウストが終幕において求めたものは「世界」を所有することだった。彼はそのため当然統治者として命令を下し行動をおこした。その過程においてはからずも敬虔な老夫妻と善良な旅人をその住居もろとも焼打し殺してしまうことになり，このことはファウストをして，限りない失望の淵においやるのである。旧案ではここで魔術との結託を断ち「カステラン」を解雇するのであったが，焼跡から来た四人の灰色の女達の一人「憂い」により盲目となることは先にも触れたとおりである。

ファウストの求めた「Welt」とは古高ドイツ語で weralt にあたる。更にこの語は古高ドイツ語の wer とゴート語の alds から成り立ち前者は Mann に相当し，後者は Zeit, Alter にあたる。このことは明らかにゲーテの言葉をまつまでもなく，ファウストは別の言い方をもってすれば「時の流れ，否，歴史の統治者」たらんとしたのであった。しかし盲人となったため，客観的には不可能とは言えないまでも非常に困難におちいったのであった。なぜならわれわれは一人で，社会に存在することは不可能なのである。"Der Mensch kann ihr (=Gesellschaft) nicht entgehen, nicht ausweichen" (Maximen und Reflexionen: Gesellschaft und Geschichte. 123) 冒頭の個所はまさしくファウストが彼の "目" となるような援助者が現れない限り，為政者としては失格することを意味している。なぜなら人間はいわゆる価値意識をもちながらはじめて "歴史的" 存在者として生存し得る存在者なのである。

(Ⅲ)

古くギリシャに伝わる Hyginus-Fabel 220. で「憂い (cura)」の話しをヘルダーから聞いたゲーテはファウトに登場して来る「憂い」の素材にしたということは前に述べた[註6]。そしてゲーテも人間の本質をあらわすのに「憂い」という言葉をもちいれたのは注目すべきことであろう。

まず物語の起点はファウストが学者として自己の学問それ自身にふと疑問を抱き，この世の絶対的なものへの探求は，その道程どころかなおまだほど遠いことを歎くことからはじまる。そして宗教と対立する魔術（当時，前者が神への帰依としてとらえられていたのに対し後者はプロメトイス的精神としてみなされていた。ヨハネス，ファウストが神の摂理を探らんとする錬金術師だったことも，ファウスト物語には深い意味がある）の力を借りて行動するのである。そしてその道程は「世界をその最も奥深いところで統べている」いわば絶対的存在への問いかけでもある。この問われたものと問うている者の関係は一つの立場によって決められた一つの観点をとおして，しかもそれが必然的関連であれば，問われたものはその視野の中に一部を顕し得るが，他の部分は問われたことにより問いの背後に蔭れてしまうのである。ゆえに問いはくり返されねばならず，結局は対象自身との運動のうちに（これはヘーゲルの運動概念にもなる— "Indem ich das, wodurch die Wissenschaft existiert, in die Selbstbewegung des Begriffs setze, …"）求められたものは姿をあらわすのである。ファウストが試行錯誤をくり返すのも当然で "Es irrt der Mensch, solang' er strebt." (317) この生きかたはキールケゴールの言葉に従えば「der Einzelne (den Enkelte)」である。この「単独者」としてのファウストの行為は現実的自己が様々の事物的・人間的諸関係の中において，よし魔術の力を借りたにせよ，編みだされた経緯に他ならない。別の云い方をすれば幼児が他人の中で振舞う行動のようなものでなく自他対立が存する主体間の働きあいのなかでなされつつ，既存の歴史的社会的関係，もっと身近に捉えば既存の人間関係を前提としながら，可能的なそれへの関係として作用するものである。この実践的行為的連関は即ち人間の存在なのである。それゆえファウストの問いかけはかかる行為であり現存在(ダーザイン)そのものなのである。ゲーテの場合でも現存在の本来的な在り方は「cura」という存在的な概念の意義変化をたどってゆくことより，かつて触れたのでいまここでくわしく立ちいらないが，ハイデガーの云う「不安 (Angts)」をとおしての「配慮 (Sorge)」であることは先にも述べたとおりである。

現実的自己が事物及び人間関係において，そこになんらかの変異，疑義等を認め感じた時，人は内省へといざなわれ（現実的に対する）可能的存在者になるのである。では現実（性）に対して可能（性）とはどういうことを意味しているのであろうか。確かに可能性とは「未だ現存していない」ことであり「未だ現存していない」は一つの時間概念であり，それが現実性となるならば，それは過去から現在を経て未来に流れるいわゆる通俗的・物理的時間経過のうちで現実化されるが，しかし時間的経過それ自身がこれを現実化したのではない。それは可能性のうちに「既存」しているからこそ現実化されるのであり，同時にそこには未だ現実化されていない可能性も秘められているのである。即ち過去としての未来がここにある。"Wir alle leben vom Vergangnen und gehen am Vergangenen zugrunde." (Maximen und

Reflexionen : Gesellschaft und Geschichte, 94)このように可能性と現実性を結ぶ，物理的時間（temps）といわば内的時間（dureé)註7は次元を異にしているものの，この二つの交錯によって歴史的社会，否，歴史が成立するのである。"Es gibt zwei Momente der Weltgeschichite, die bald auf einander folgen, bald gleichzeitig, teils einzeln und abgesondert, teils höchst verschränkt, sich an Individuen und Völkern zeigen." (Maxiemen und Reflexionen: Gesellschaft und Geschichbe, 212)

人間はこのように被投的・企投存在の構造（geworfener Entwurf）をそのうちにもっているからこそ，つまり可能的存在者であればこそ歴史的存在者としても見なすことができるのである。可能性ということはそれ自体考えると現実性ということに対してでてきた言葉であるので，現実性をぬきにしては考えられない。不安をその本性とする配慮を基礎としての被投的・企投存在，つまり可能的存在者をより深く考察することは，畢竟，人間の現実と理想をいかに解するかにかかってくるものである。ここに「価値」というものがあらわれてくるのである。それはわれわれを越えた絶対的な価値体系があるのではなく，その時代に則した，社会に対してイデーのような役割を果しているような体系である。したがって各人にとっては違う最高の価値があるのも当然である。別な見方をすれば，己の生存を究極的に支えているものであり，同時にそれはまた歴史の目標になることに基づいて，単独者として絶えず参加しているものである。したがって，或る文学の現代的意義を考える時（根底においては「孤」なる「個」への考察である）まず現代の歴史的状況から問いおこさなければ，問いのもつ構造からそれは内的・必然的関連をもたないのである。ゆえに古典主義文学――ここではゲーテ・ファウストであるが――が過去のものであるか否かは，このような前提のもとで，その問いに解答できるか否かにかかってくる。（その文学の形式・文体等の比較それ自体決して無意味であるというのではない，が上記の問題こそ第一に考えるべきなのである）

では如何なる状態をもって現代の多様化された状況とするのか。このことについては，筆者の手に及ぶところではない。しかし現代の特徴をあえて言うとするならばルネッサンス以降，とりわけ20世紀後半に著しい進歩をとげた，いわゆる科学をもってして言うことができるであろう。いまやその力により人類はこの地球上以外の場所にも，その居住の可能性を求めようとしている。かつては自然の中に自然それ自身を「神」として崇めていた祖先から，やがて自然の法則を探りあてることにより，機械をつくり工業の発展をうながした。人は科学の力により自然を征服したという。なるほど精密な物理学的計算が洪水で苦しんだナイルの地方を豊かな土地にしたかもしれぬ。エベレストの登頂もまた天体の神秘を探った宇宙船もこれまた科学の勝利かも知れない。しかし一方をそれらのデーター，設計等はみな自然の法則に基づくものである。われわれ日常生活の身のまわりをどれ一つとってもみなこの法則より成り立っているのである。自然の「征服」と科学の力でどれほど誇ろうとも，それは自然へのより深い「従順」に他ならないのである。"Der Mensch gehört mit zur Natur, und er ist es, der die zartesten Bezüge der sämtlichen elementaren Erscheinungen in sich aufzunehmen, zu regeln und zu modifizieren weiß". (An Zelter, 31. März 1831) それゆえ，本来の自然の世界に対し，科学によって生みだされたこの文明社会もつきるところすべて自然の力が働いており，この社会に生きている限り人間の存在の根源は自然の力のうちにあると言えよう。"Es ist mit der Geschichte wie mit der Natur, wie mit allem Profunder, es sei vergangen, gegenwärtig oder zukünftig:" (Maxiemen und Reflexionen:

Gesellschaft und Geschichte, 225) 歴史も自然も深遠なものも，過去現在未来を問わずみな同一次元でとらえているのはこの証左に他ならない。

(VI)

われわれが云ういわゆる人工的なものは決して自然に対立するものでなく，可能性の現実化として現存在において根源的に働く自然の力に基づくものであり，それを前提としながら一方では物理的及び内的時間性を根底におく価値観に基づく可能性の現実化から歴史の概念をとらえてきた。そして現代の歴史状況のきわだった特徴として機械，技術文化を挙げた。そして価値体系というものも一応は社会の構造を反映し，またその組織を維持していることも確かである。しかし不安をその基盤とする配慮により，被投的・企投存在が社会の内で自由に企投する時，その目的がはたして目的として価値たり得るか否かがその意識の中にのぼってくるので，この体系は絶えず別の体系と超出でき得るのである。ただそれが確立されないのは，それに相当する社会がないからに過ぎない。

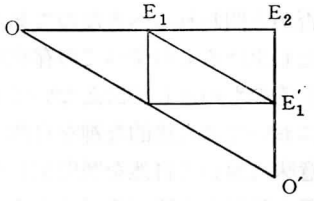
現代の科学の進歩による人工的なもののなかに人然の力を見る限り，歴史の根源もまた自然のなかに求められなければならない。したがってわれわれが求めてやまない生存の価値，歴史の目標も自然を基礎として定立させねばならない。"Aus der Natur, nach welcher Seite hin man schaue, entspringt Unendliches." (Maxiemen und Reflexionen: Gott und Natur, 5) しかしこの自然はどこまでも尽きるところがないのである。この汲めども尽きせぬ自然に対応すべく定立した生存の価値，歴史の目標がどうして唯一無二であることが知れよう。それにも拘らずわれわれは価値意識なしでは一日たりとも歴史の目標に向えないことは前にも述べた。"Es irrt der Mensch, solang' er strebt." と迷いとは，よどみに浮ぶうたかたの中に在りながら，定かなるものを求め生き続け，耐え続けなければならぬとするならば，よしその途上において内省へとさそわれ本来的自己に立ち戻ったとしても，その根源的根底が永遠に測り知れざる自然である限り，われわれの当面する問題の危機も当然この迷いのうちにのみ訪れてくるのである。それゆえわれわれはいっそう本来的自己へ立ち還り，不可能なことを意識しながらもヘゲールの自己運動概念である主体的な問いのくり返し，否定の連続の中にわが身を入れなければならないのである。このような観点に立ってこそ，古典主義文学—ゲーテ文学—がいまなお現代的意味をもちうるか否かと問われるべきなのである。

歴史の根源として求められる人工的なものを含めて，生きとし生けるものすべての存在を支配する自然の存在はいわば絶対的存在，云い換えれば「神」そのものとして云えないであろうか。別な見方をすれば「汎神論」であろう。しかし現代においては人格的な神を自然のうちに認めてはいない。が，歴史を自然化させ，否，広義な意味において自然を歴史化しつつある観点に立てば，かつての自然主義とは別な，新自然主義の時代とも呼べるであろう。この時代において，ゲーテ文学が過去のものとして位置づけられるならば，確定した"無"という価値をそのうちに認めたことになるのである。このことは即ち，われわれ生存の根源基盤である自然の存在を十分知り尽して，はじめて云えることであり "Wo faß ich dich, unendliche Natur?" (445) それが不可能である今，その決定論的問いかけは問いとして意味をもたないのである。否，その問いかけそれ自身が，自己をして自然をその根源基盤とする可能的存在者としての人間たることを忘れていることを露呈しているのである。ここにわ

れわれはファウストに関してゲーテがマイヤーに宛た手紙の一節を引用せざるを得ないのである。"…Wenn es noch Probleme genug enfhält, indem —— der Welt-und Menschengescichte gleich —— das zuletzt aufgelöste Problem immer wieder ein neues aufzulösendes darbietet, so wird es doch gewiß denjenigen erfreuen, der sich auf Miene, Wink und leise Hindeutung versteht."(An Meyer. 20. Juli 1831) この僅かに暗示をしながら，あとは読者にその内容をゆだね，最後の問題が解決するとそれがまた新しい問題を提示する，このありかたこそ時代を越えて最も注目すべきことではなかろうか。人間はいつの時代も"Es irrt der Mensch, solang' er strebt."であり，努力するからこそ迷い，迷うからこそ人間なのである。背理的存在のもつそれは宿命なのかもしれない。

註

1) 拙稿 Kameraden Nr.7 1971 S.46～51ここではゲーテとホフマンスタールを対比することによりファウストの現代的意義を述べた
2) Hodin, Josef Paul :Kafka und Geothe —— Zur Problematik unseres Zeitalters London・Hamburg S.78ff. また Stehlin, Peter: Zum Goethe-Bild des literalishen Expressionismus Zürich 1967. S.78 でも両詩人の関係，カフカがゲーテの尊敬者であったことに若干ふれている。
3) 拙稿 信州大学人文科学論集第1号。帰って来た詩人 Franz Kafka" 1966.
4) Binder, Hartmut: Motiv und Gestaltung bei Franz Kafka Bonn 1966 S.265—285
5) 拙稿 ゲーテ年鑑 第12巻 "ファウストと憂い" 日本ゲーテ協会 1970
6) 拙稿 前掲書 第12巻
7) 時間の問題を人間存在の根本的問題として捉えた現象学派の先駆者は F, Brentano であろう。彼は Kant の"等質的時間"に対して"表象の時間的様態"(die Temporalmodi des Vorstellungs)を認める。彼の時のとらえかたは"今の過去""今の未来"„今の現在"として内的知覚の明証は現在に限られているのである。Aristoteles から端を発したこの時間論は Bergson によって大きな進歩をとげる。等質的時間の抽象性を指摘しながら，純粋持続としての真の時間にふれるのである。(Schöpferische Entwicklung, S.308ff) そして彼は通俗的時間 temps を真の時間 dureé から区別する。更にこれに続くのが Husserl であり (Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins) 〔邦訳：内的時間意識の現象学，立松弘孝訳 みすず書房〕彼は Brentano に時間論を求め，意識の志向性によって時間意識の構成を解こうとした。$\overline{oE_2}$ は今の点の系列で根源点与件 E_2 と過去把持的変様 o' 及び E'_1 が一つの瞬間のうちに合一されるのである。このような「経過様態の二重連続」が経過現象としてとらえられている。そしてこの $\overline{o\,E_n}$ と $\overline{E_n o'}$ を各々 Quer-Intentionalität と Längs-Intentionalität と呼んだ Heidegger は $\overline{o\,E_n}$ を der vulgäre Zeitbegriff (通俗的時間性) とし die Innerzeitigkeit (内的時間性) を存在論的分析から"Sorge"を"Sich-vorweg-schon-sein-in (der Welt) als Sein bei (innerweltlich begegnendem Seienden) と把捉することにより，"死の現象"を媒介として求めているのである。



主要な参考文献

Heidegger, Martin : Sein und Zeit. Tübingen 1963.

(1971. 11. 20)

Zusammenfassung

KEIJI KATO

Gedanken über den Wert der klassischen Literatur — gesehen von Goethes Faust

Ich untersuche in diesem Aufsatz die Frage, ob Goethes Werke in der heutigen Zeit noch von Wert sind. 1966 hat eine Diskussion zu diesem Thema zwischen Prof. Dr. E. Staiger und dem Dichter Max Frisch stattgefunden, die sich über ganz Europa ausgebreitet hat. Über klassische Musik und bildende Künste sind mittlerweile ebenfalls Wertdiskussionen entbrannt.

Die moderne Literatur hat einen Hang zum Expressionismus und verleugnet gern die Wert der Klassik. Seit dem Beginn der industillen Revolution im letzten Jahrhundert sind viele alte Werte vergessen worden und neue Kulturformen erschienen. Manche Dichter, denen die alten Werte heilig waren, fühlten sich von der neuen Zeit überfordert. Unter diesen Umständen mußtn sich vile von ihnen darum bemühen, einen neuen Weg zu leben zu finden. Bei dem Zusammenstoß von Altem und Neuem hatten gegen Anfang des 20. Jahrhunderts z. B. Rilke, Kafka usw. einen Ausweg zu suchen. Von diesen Problemen aus gesehen tritt der Unterschied zwischen Goethe einerseits und Kafka, Rilke usw. anderseits deutlich hervor. Das Rad der Kulturgeschichte, von seinem tiefsten Punkt aus wieder aufsteigend, gilt als Überzeugung Goethes, während Kafka scheinbar keinen Ausweg sieht. Wenn man Goethes Faust statt als Drama als Roman in Form eines Bühnenstücks sieht, erkennt man die Ausdrucksform des Raffsatzes (wie bei Kafka).

Kann man mit dieser Erkenntnis den Vergleich zwischen Kafka und Goethe —— in weitestem Sinne zwischen klassischer und moderner Literatur —— wagen?

Ausgehend von Goethe-Zitaten habe ich das Problem untersucht, unter Berücksichtigung einiger Aussagen Heideggers, der bei Goethe eine Neigung zum Existentialismus festgestells hat. Wie ich in vorigen Aufsätzen z. B. „ Faust und die Sorge" bereits ausgeführt habe, besteht das Wesen des Menschen bei Goethe aus der „Sorge" (cura). Er wird von zweierlei Arten von Zeiten beherrscht : von der „temps" und der „durée" (Bergson). Bei Husserl erschienen die Begriffe „Längs-Intentionalität" und „Quer-Intentionalität".

In unserer Welt lebt jeder nach seiner eigenen Wertanschauung, aus der heraus die Geschichte, die ja der Mensch macht und die damit ebenso von „temps" und „durée" abhängt, interpretiert wird. Das charakteristische Merkmal für den Lauf der heutigen Geschichte ist der beherrschende Einfluß der Naturwissenschaft, die wiederum auf den Gesetzen der Natur beruht. Das Rätsel der Natur aber ist unlösbar. Solange also die

Basis von Wertanschauungen die Natur selbst ist, gibt es keine einzig richtge Wertvorstellung, denn: „Es irrt der Mensch, solang' er strebt". Wie dieser Satz Goethes zeigt, muß auch heute noch immer wieder die Frage nach dem Sein des Menschen gestellt werden, weil es nicht nur eine einzige Wahrheit gibt.